

令和元年5月28日現在

機関番号：37102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K00711

研究課題名(和文)小石原焼と小鹿田焼の里における文化的景観表象の分析と評価

研究課題名(英文) Identification and Evaluation of Cultural Landscape representations in the Traditional Pottery Villages of Koishiwara and Onta, Japan

研究代表者

山下 三平 (Sampei, YAMASHITA)

九州産業大学・建築都市工学部・教授

研究者番号：50230420

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は小石原と小鹿田の景観表象を、窯元/家族ならびに訪問者の視点から把握し、相互の比較・評価をすることで、伝統的な第二次産業を生業とする文化的景観の保全と活用に有用な知見を追究した。主な成果は以下のとおりである：1) 近代的機械類を多く取り入れた小石原の場合、まちなみ景観の要素である道、サインおよび家屋は、扱うべき対象として合意が得られやすい。2) 伝統的手仕事を数多く残す小鹿田では、作陶作業の表象の扱いに取り組むのが本質である。3) 家屋、装飾および川は、場所の違いに関わらず、訪問者が注目しやすい景観表象である。4) 小石原では宗教設備と花、小鹿田では人間を地元特有の表象として重視すべきである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小石原の焼の里は小鹿田焼の里の起源であるが、前者は拡大路線をとり、後者は伝統を堅守した。後者は重要文化的景観地であり前者はそうではない。このように関連が深くかつ対照的な里同士の表象・評価を比較することで、第二次産業の文化的景観の保全のクリティカルな条件を、明らかにすることができた。また、両里への訪問者が注目する里の事物を現地での行動に基づいて調べて地元窯元・住民と比較することで、主体間の関心の違いを知るとともに、両里の景観表象の特徴を明確に把握することができた。景観保全をすべき範囲と重要度を空間的に知らしめる貴重な情報として、地域のイメージマップが明示された。

研究成果の概要(英文)：We survey scenic representations and assessments of traditional pottery villages of Koishiwara and Onta, Japan by having visitors take photos there and make comments on them. We compare the results by the visitors with those by the villagers. Thus we explore how the cultural landscape formed and nurtured with traditional craftwork should be utilized and managed. The findings are as follows: 1) In Koishiwara, where they have incorporated much modern machinery into traditional production, streetscape elements are fundamental in building consensus between insiders and outsiders. 2) In Onta, where they have sustained a wide variety of traditional handwork in pottery, the representation of the phase of work is universal in addressing the landscape. 3) Visitors tend to pay much attention to roadside buildings, ornaments and streams regardless of place. 4) Religious facilities and flowers grown in Koishiwara and human beings in Onta should be important in managing each cultural landscape.

研究分野：景観工学

キーワード：文化的景観 民芸運動 陶芸 写真投影法 伝統産業

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2004年の文化財保護法改訂により文化的景観が生きた文化財として法的に位置づけられた。これを受け、重要文化的景観が各地で選定され、地域文化の維持と活性化のための資源として活用されるようになった。そこでは第一次産業が重視される傾向にある一方、第二次、三次産業の文化的景観の評価・選定が今後、増加すると予想される。

文化的景観の保全をとおした地域デザインでは、まず実態・実体の把握が不可欠である。本研究は2014年度までに、民陶・小石原焼の産地である福岡県朝倉郡東峰村小石原の地域住民・陶芸家を対象とし、地図上で産地を描写してもらい、そのオーバーレイから、文化的景観のイメージの範囲と強度を明らかにした。また、地元陶芸家・窯元に身近な環境を写真撮影してもらい評価する写真投影法を適用し、シーンの主対象を38種に類型化し、その頻度分布を求め、かつそれらに対する評価を把握した。

本研究ではこれらに新たに観光客・訪問者の視点を取り入れるとともに、対照的な地域との比較を行った。そのために、大分県日田市の小鹿田焼の里を加えた。小鹿田焼の里は小石原焼の里に起源をもち、よく似た作風を現代に伝える。ともに柳宗悦らの民芸運動に注目され触発されたが、小鹿田焼の里のほうが職人的伝統の継承面で評価がより高い。小石原では窯元数が江戸時代の10軒から民芸ブームの1960年代以降増加し、現在は44軒である。2013年に紫綬褒章を受章した窯元があるなど、民陶を発展させた作家性の追究も見られる。一方、小鹿田焼の里は10軒から始まり、現在まで一子相伝を続けている。この地は2008年3月に、文化庁の重要文化的景観に選定されている。

2. 研究の目的

本研究は陶芸の文化的景観地の景観表象を、関連が深く対照的な2地域について、窯元/家族ならびに訪問者の視点から把握し、相互の比較・評価をすることで、伝統的な第二次産業を生業とする文化的景観の保全と活用に有用な知見を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 小鹿田焼の里の陶芸家の景観表象をイメージマップと写真投影法で把握

小石原は陶土協同組合加盟の44軒中36軒の窯元と、小鹿田は10軒すべての窯元の協力が得られた。彼らに作陶に関する詳細をヒアリングし、産地の範囲を地図に描いてもらった。小石原は本研究に先立って行われた。小鹿田は2015年8月に実施した。地図は100m四方のメッシュで頻度を示し、両産地の比較を行った。

小鹿田において窯元/家族に写真投影法による調査協力を依頼し、7軒の協力を得た。身近な風景を写真とそのコメントで記録してもらった(カメラ(FUJIFILM製, Fine Pix XP 150)/SDカードと記録用紙)。実施は2016年5-6月であった。小石原は本研究に先立ち、2013年3月に行った。皿山地区の全15軒に依頼し、26名の協力が得られた。

(2) 小石原と小鹿田の訪問者が注目する景観表象を訪問撮影法で把握

2016年7月に実施した。福岡市とその近郊の大学(九州産業大学、福岡大学、西南学院大学、九州大学(以上、福岡市)、久留米工業大学(久留米市))から40名の大学生が被験者として参加した。調査の概要を説明した後で、2台のバスに分乗し、先に小石原に行きその後小鹿田に向かうグループと、その逆のグループに2分して対象地域を訪問した。訪問先で1時間ほどの時間を与え、写真の撮影と意見の記録を自由に実施させた。

(3) 両里の陶芸家と訪問者が注目する景観表象を比較・評価・抽出

1) 主対象、2) 評価、3) 道具、4) 作業および5) 人間を扱った。1)と2)は映像と意見等の記録から判断した。2)は「肯定的」「否定的」「中立(明確な価値判断の表現が示されていない)」に分類した。3)-5)は作陶に特徴的な構成要素として、さらに画像から読み取り、それらの有無と種類を扱った。写真映像のコンテンツアナリシスの手法に従い、被験者による映像と意見等の記録をもとに分類し、4名の分析者の繰り返しの合議により決定を行った。

訪問者としての大学生被験者の捉えた景観表象とその評価の特徴を検討した。窯元とその家族の捉えた景観表象とその評価との比較を行った。また、小石原と小鹿田の比較を行うことで、両里に対する訪問者の意思の違いを追究した。

4. 研究成果

(1) 場所間のイメージマップの比較

小石原では、窯元の多く集まる皿山地区周辺が100%選ばれる(図1)。60%から80%の領域は皿山地区周辺以外の窯元をも含むように選ばれる。焼成に薪を使用しなくなった小石原は自然資源にかつてほどには依存しておらず、窯元の多く集まる場所以外は20%と認識が薄れる。60%以上の被験者が共通認識している領域は行政域の中に含まれるが、行政域の西側は窯元が存在していないため、ほとんど認識されない(図1の赤線)。集水域では、60%以上の被験者の認識領域に近いが、北側と東側に認識されていない部分がある(図1の青線)。

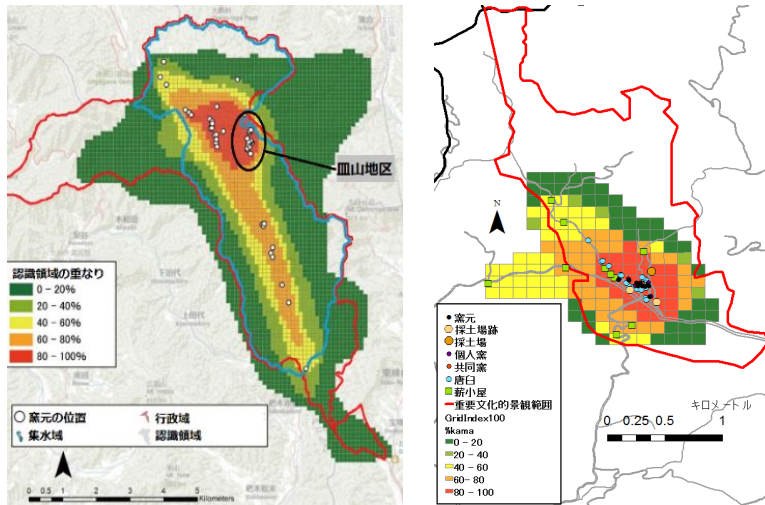


図1 認知度・重要度を示すマップ。左：小石原、右：小鹿田

小鹿田では、すべての窯元に認識されている領域は窯元の敷地が多く集まる範囲と重なる。作陶を主に行う場所として100%の窯元に認識される。80%の窯元に選ばれている範囲は唐臼がすべて入る領域である。60%の窯元に選ばれている範囲は新小屋を基準に多く選ばれる。焼成の際に製材所の廃材を乾燥させたものを使用するため、多くの窯元に認識される。40%未満の認識率である領域は少なく、窯元の認識している領域がほぼ同じである。重要文化的景観に選定されている範囲の北側にある

池ノ鶴地区は窯業に関わる施設がないため、とくに認識されない。重要文化的景観に選定されている範囲に80%以上の共通認識領域は含まれる。しかし、40-60%の認識領域は西側に大きくはみ出す。この領域には新小屋があるため重要である。

(2) 場所間・主体間の景観表象の比較 (図2,3)

小石原血山の場合、外部からの訪問者と住民との間で、景観の保全を検討する際に、まちなみの表象である道、サインおよび家屋は、扱うべき対象として合意が得られやすく、取り組むのが効果的である(主体不偏)。

小鹿田血山では、作陶の様々な作業である作業様相の表象が訪問者と住民の双方に注目され、その扱いに取り組むのが本質である(主体不偏)。ただしそのために、重要文化的景観の維持管理に関わる行政担当部課の、住民に対する、慎重かつ粘り強い働きかけが必要である。

家屋、装飾および川は、場所の違いに関わらず、訪問者の視点を考えたときに、注意を払うべき伝統的の第2次産業、焼物の里の景観表象といえる(場所不偏)。とくに川は、外の目をもつ訪問者に特徴的であり重要である。

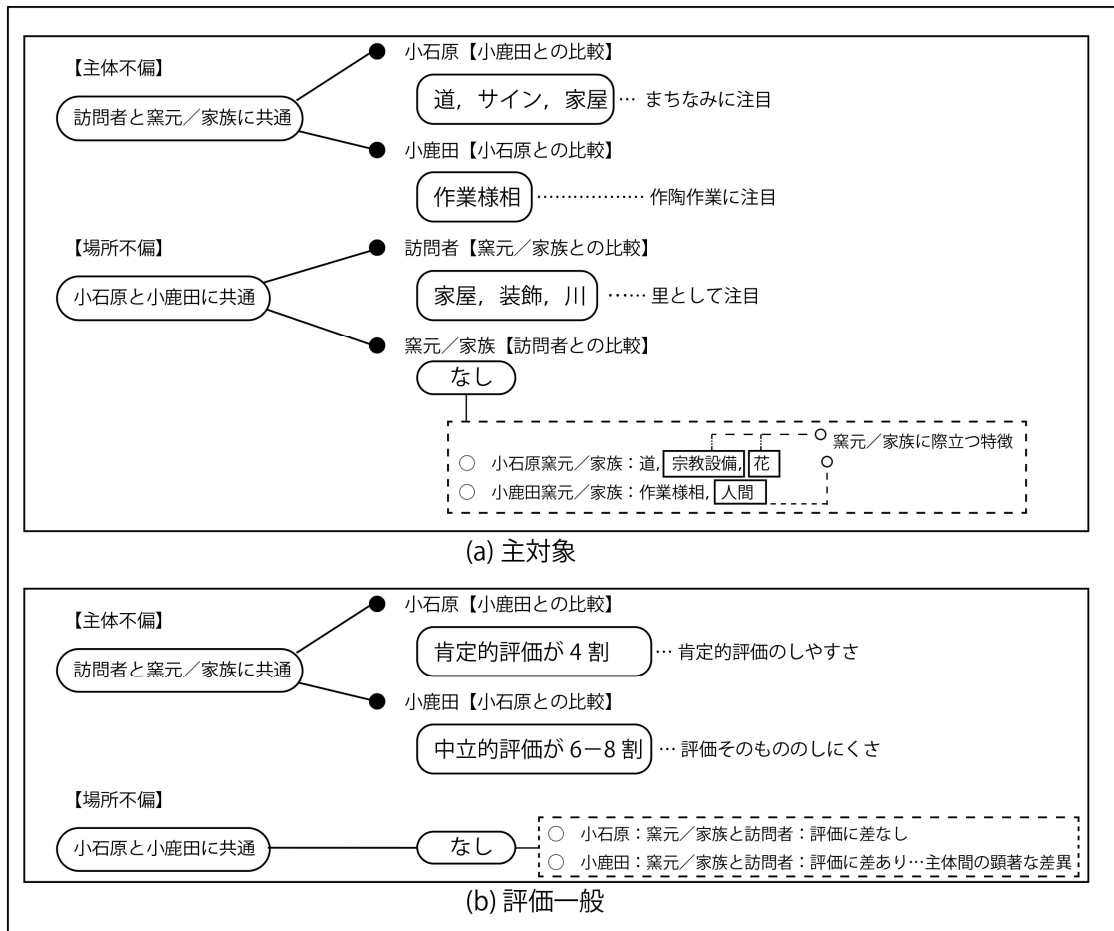


図2 主対象と評価一般の主体間ならびに場所間の関係

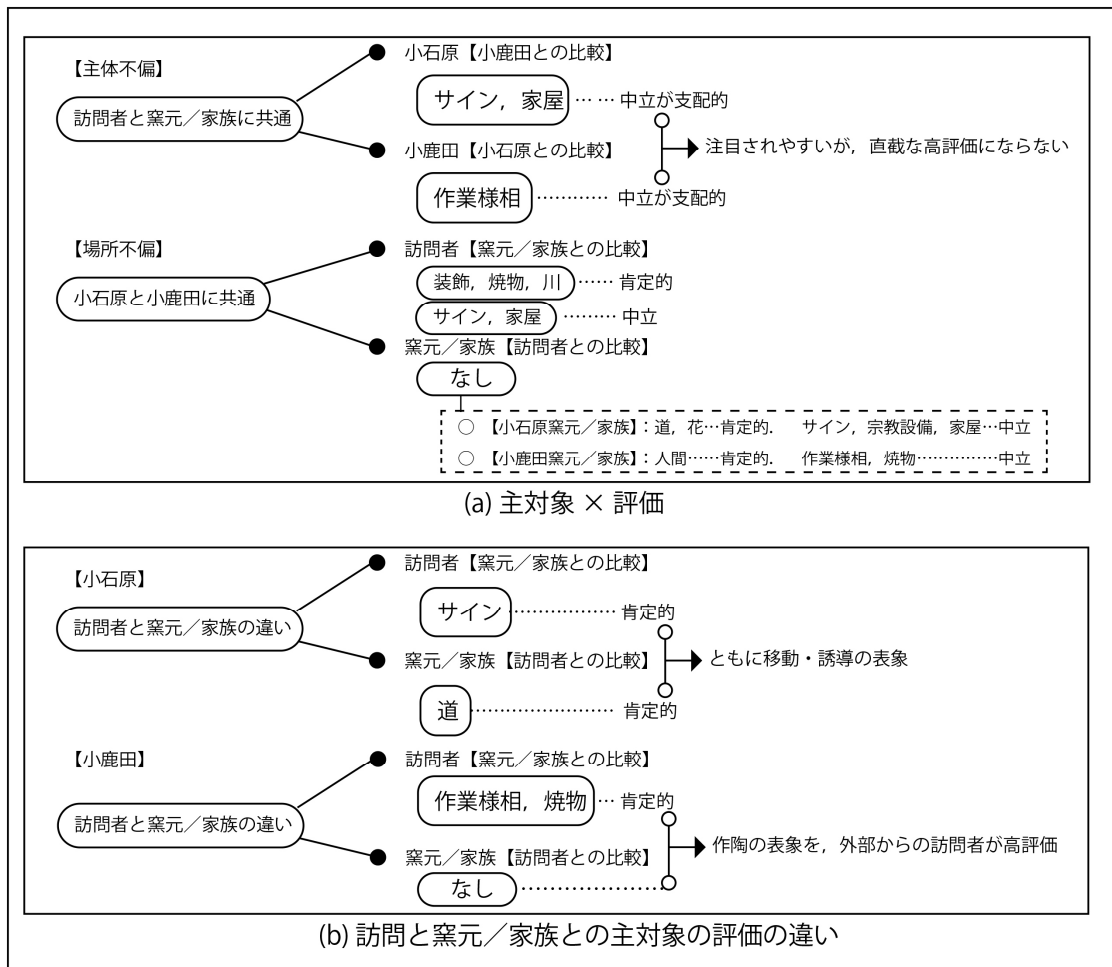


図3 主対象と評価との関係の主体間ならびに場所間の関係

小石原では宗教設備と花、小鹿田では人間が表象として固有の重要性をもっており重視すべきである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

山下三平, 丸谷耕太, 林珠乃, 大森洋子: 窯元とその家族の目を通した陶芸の里・小鹿田皿山の景観とその評価, 土木学会論文集 D1(景観・デザイン), 74(1), pp. 51-62, 2018.

〔査読有〕

山下三平, 丸谷耕太, 内山忠, 栗田融: 陶芸の里・小石原皿山の景観表象の把握と評価 実存的景観論の試み, 土木学会論文集 D1(景観・デザイン), pp.20, 73(1), pp. 1-20, 2017.〔査読有〕

K. Maruya, S. Yamashita and T. Uchiyama: Community Spaces in the Minds of Traditional Craftsmen in a Pottery Village of Japan, Frontiers of Architectural Research, 4(4), pp.253-262, 2015.〔査読有〕

〔学会発表〕(計8件)

工藤悠太, 山下三平, 丸谷耕太, 林珠乃, 大森洋子: 小石原と小鹿田の文化的景観の表象: 来訪者と窯元・家族との比較, 土木学会西部支部研究発表会, 2019.3.

林田直哉, 山下三平, 大森洋子, 丸谷耕太, 林珠乃: 平成29年7月九州北部豪雨による小鹿田焼の里の被害とその報道, 土木学会西部支部研究発表会, pp.537-538, 2018.3.

奥村祥也, 山下三平, 大森洋子, 丸谷耕太, 林珠乃: 2017年九州北部豪雨による小石原焼の里の被災とその報道, 土木学会西部支部研究発表会, 2018.3.

S. Yamashita, K. Maruya, T. Hayashi and Y. Omori: Landscape representations of craftwork through the eyes of craftspeople: a case of the pottery village of Onta, Japan, 23rd International Symposium on Society and Resource Management, Umea, Sweden, 2017.6.

石井克典, 馬場直也, 山下三平, 大森洋子, 林珠乃, 丸谷耕太: 写真投影法を用いた小鹿田焼の里の景観の把握と評価 - 窯元と来訪者との比較 -, 土木学会西部支部研究発表会, 2017.3.

馬場直也，石井克典，山下三平，大森洋子，林珠乃，丸谷耕太：写真投影法を用いた小石原焼の里の景観の把握と評価 - 窯元と来訪者との比較 - ，土木学会西部支部研究発表会，2017.3.

S. Yamashita, K. Maruya, T. Hayashi and Y. Omori: Shared place for pottery as a representation of continuing cultural landscapes: comparison between tradition and modernization, 22th International Symposium on Society and Resource Management, Houghton, MI, USA, 2016.6.

熊谷隼斗，山下三平：窯元の認識する陶芸の里について - 小石原と小鹿田の景観の比較の試み - ，平成 27 年度土木学会西部支部研究発表会講演概要集，2016.3.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.ip.kyusan-u.ac.jp/J/landscape/>

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：大森洋子

ローマ字氏名：Yoko OMORI

所属研究機関名：久留米工業大学

部局名：工学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁): 30290828

研究分担者氏名：丸谷耕太

ローマ字氏名：Kota MARUYA

所属研究機関名：金沢大学

部局名：人間社会研究域

職名：助教

研究者番号 (8 桁): 50749356

研究分担者氏名：林珠乃

ローマ字氏名：Tamano HAYASHI

所属研究機関名：龍谷大学

部局名：理工学部

職名：実験助手

研究者番号 (8 桁): 60721537

(2) 研究協力者

なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。